



写真-1 高砂港向島突堤・東防波堤を望む（令和6年年4月撮影）

■ 工樂松右衛門が修築した高砂港の防波堤

写真-1・2・3 は、高砂港向島突堤の東防波堤を撮ったものです。

この石積みの防波堤は、工樂（くらく）松右衛門が修築した東風請波止（こちうけはと）と一文字波止で、当時（1800 年代）の石積み部分が部分的に残り、高砂湊の修築と、そこに用いられた土木技術の歴史を現代に伝える貴重な構造物です。

工樂松右衛門の生涯と事績は『高砂市史』や「兵庫県高砂 工樂松右衛門 公式サイト」で紹介されていますが、最近、工樂家古文書の調査から新たな事実が判明しています。

平成 28（2016）年、工樂松右衛門旧宅が工樂家より高砂市に寄贈されましたが、建物内に保存されていた約 3,800 点の古文書を高砂市教育委員会が調査委託してまとめた成果「工樂家文書調査報告書」（2019 年、高砂市教育委員会）において、これまで不明だった多くの点が明らかになりました。

ただ、これを全部読むのは大変なので、これをもとに初代から三代工樂松右衛門の活躍ぶりをまとめた『湊とともにー工樂松右衛門と江戸時代の高砂ー』および『神戸史談』に掲載された神戸学院大学・松田裕之教授の寄稿「近世海事の名工・工樂松右衛門の事績に関する再検証～兵庫津佐比江新地の御影屋松右衛門を中心に～」を読みつつ、既往資料に適宜上書きしながらまとめてみたいと思います。



写真-2 東風請波止（手前）と一文字波止



写真-3 東風請波止から北を撮影

■ 工樂松右衛門の略歴

工樂松右衛門は播磨国加古郡高砂町（現・高砂市）出身で、西日本屈指の港湾都市・兵庫津を拠点に活躍したわが国海事工学の草分け的存在です。実業家であり発明家だった松右衛門の生涯は、概ね下記のとおりです。

- ・寛保 3（1743）年：高砂町戎町（えびすまち）の漁師・釣屋善三郎の子として生まれる。少年期に高砂町東宮町（ひがしみやまち）の廻船業・宮本長三郎の養子となる。10 代後半、養父・宮本長三郎の手配により、兵庫津北浜西出町の船具商兼船頭・鍛冶屋善兵衛に奉公する。
- ・宝暦 13（1763）年：21 歳で兵庫津の廻船問屋・御影屋で船乗りになる。
- ・安永 8（1779）年：37 歳で御影屋平兵衛の持船・春日丸の沖船頭（自分の船を持たない雇われ船頭）となる。
- ・天明 5（1785）年：兵庫津の船具商・喜多二平の協力を得て刺帆の改良に着手、約 5 か年をかけて丈夫でしなやかな木綿製の一枚織帆「松右衛門帆」を考案する。
- ・寛政 4（1792）年：御影屋一統の荒井藤兵衛から身代を譲り受け、佐比江新地に御影屋松右衛門を構え独立する。
- ・寛政 8（1796）年：54 歳の時、直乗船頭（船主兼船頭として廻船業を行う）となる。
- ・享和元（1801）年：エトロフ島シャナ会所近くのアリモエに湊を築く。
- ・享和 2（1802）年：60 歳の頃、蝦夷地埠頭築造の功により幕府より 30 両三人扶持を給され「工樂」の姓を賜る。
- ・文化元（1804）年：北海道箱館港築港、竜山石（たつやまいし）を運び焚場※1（たてば）を構築する。
- ・文化 4（1807）年：6 月、蝦夷地での御雇いを解かれ、兵庫津に戻る。
- ・文化 5（1808）年：6 月、高砂の川方世話役・柴屋三郎右衛門らが高砂川の川浚えについて、松右衛門に協力を要請する。冬、高砂川浚普請と湛保の築造を行う。
- ・文化 7（1810）年：姫路藩主より金 10 両と五人扶持、御水主並（おこなみ）として一代限り召し抱えられる。8 月 20 日、兵庫津より高砂へ居住を移す。
- ・文化 9（1812）年：8 月 21 日、松右衛門、高砂の自宅にて死去。享年 70。

※1 焚場：木造船の船底に付着したフジツボなどを取り払うために船底を火で焼く場所のことで、広範囲にわたって海底に石を敷き詰めた構造物である。ドックまたは船渠ともいう。

■ 高砂湊は姫路藩第一の商業港だった

初代姫路藩主・池田輝政は、慶長 10（1605）年、高砂神社を後の農人町に移し、その跡地に高砂城を築きます。そして、城の防御線も兼ねて周囲に南堀川・北堀川・西堀川を開削するとともに、堀川および南堀川に石垣を積んで船着場を設けるなど港湾機能を整備します。

また、年貢米輸送の中継施設とするため、堀川（高砂川）沿いに米蔵「百間蔵」（南御蔵・北御蔵）を建てます（図-1 参照）。

このようにして高砂湊は、水運によって運ばれた荷物の集散地として賑わい、その重要性を高めていきました。

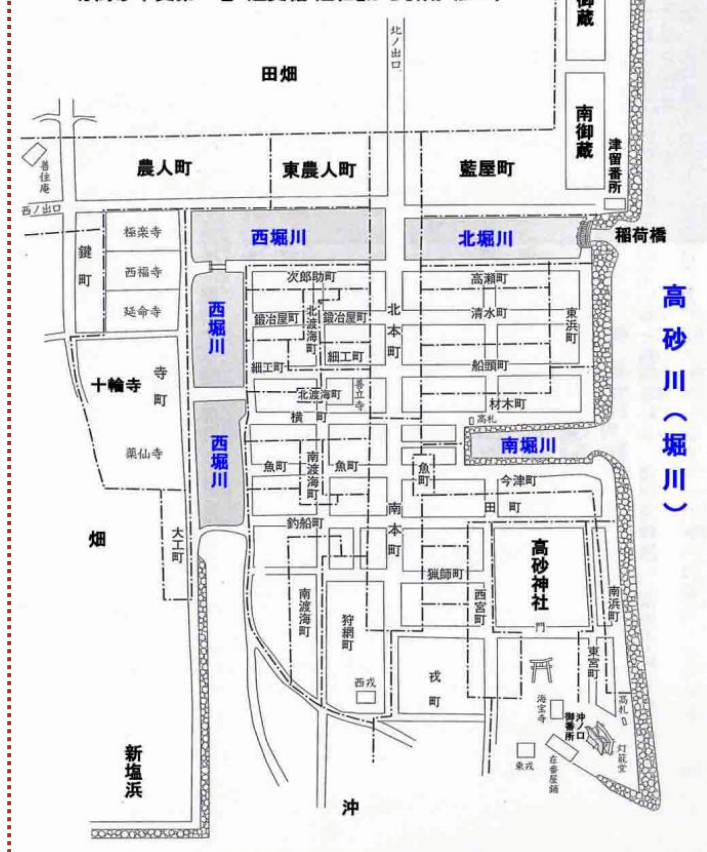
時は流れて元和 3（1617）年 7 月、姫路藩主となった本多忠政は、一国一城令による高砂城破却後の高砂の町を、港湾都市として再整備します。

寛永 3（1626）年に高砂神社を元の地に戻し、家臣団の集住地であった高砂城周辺地は町割りが行われ、堀周辺に住んでいた住民を移します。

高砂堀川で区画された碁盤目状の整然とした町は、今日の高砂町の実形になっています。堀川・南堀川に沿う東浜・南浜・材木・今津の各町には船着場や荷揚場、問屋の蔵があり、湊町高砂の中枢機能を担っていました。

図-1 近世中期頃の高砂町図(町域は推定)

(『高砂市史第二巻・通史編 近世』から引用・加工)



このように高砂は、藩主の積極的な湊町づくりによって加古川舟運と瀬戸内海航路の中継拠点として発展し、「元和・寛永の頃、益々人家弥増、大小の軒を連ねて四千余屋（中略）売買の道広く、川より海より運び来る貨物、日に万船を交易す。故に富商、豪農あり。巨大の廻船二百艘に余る。」といわれるようになりました。

寛文 11（1671）年、幕府の命を受けた河村瑞賢により西廻り航路が開発され、北国・畿内・江戸を繋ぐ全国流通の要となる航路ができ、千石も運ぶような大型廻船が就航、全国的な物流を担うようになります。高砂湊は、姫路藩における重要な四つの湊（室津、飾磨津、家島、高砂）の一つとして位置づけられました。

■ 土砂堆積により高砂湊の機能が低下する

江戸時代の中頃、高砂湊は長年にわたる土砂の堆積で湊の機能が著しく低下し、船舶の停泊に支障をきたすようになっていたため、享和元（1801）年秋頃から、幕府の代官所が姫路藩に対して、昔どおり川内で御城米の積み込みができるように高砂川口を浚えるよう度々要請しました。

翌年 6 月姫路藩は「土砂堆積はもう 1,400 間（≒2.5km）に及んでいて人力での川浚えは不可能です。川下の水落口や川筋に杭柵を設置して漏水を防ぎ水勢を増して土砂を流すように普請しており、満潮時には小型で底の浅い舩船（ひらたぶね）なら通行できます。80 年来川内で御城米を積んでおらず、沖積みしています。満潮時には舩船なら通れるので川浚えは堪忍してください」と回答しています。

高砂湊の浚渫は、姫路藩が費用を負担する御手伝普請では不可能と説明したわけです。しかし、幕府の御城米を積み込む仕事は高砂湊にとって重要であり、もし幕府が御城米を高砂以外のところで積み込んだり、他所の船を使うことになると、湊町高砂にとっては死活問題です。

■ 工樂松右衛門に湊の浚渫と修築を懇請

文化 5（1808）年 6 月 24 日、土砂堆積による高砂の衰微に危機感を持った高砂の川方世話役である柴屋三郎右衛門・塩屋太郎・鍵屋源右衛門が、蝦夷地での御雇いを解かれて兵庫津に戻っていた松右衛門に連絡をとり、「高砂が衰微していて非常に問題であるが、その第一の原因は土砂堆積にある。ぜひ松右衛門に湊の浚渫および修築をお願いしたい」と懇請します。

一方この時期、姫路藩政に変化が起きています。巨額の負債を抱えた藩の財政を再建するため、藩主の酒井忠道は文化 5（1808）年に家老の河合道臣（寸翁）を諸方勝手掛に任じ、財政改革に当たさせます。道臣は、質素倹約令を布いて出費を抑制させる一方、専売制の導入や新田開発を行うなど国産振興に熱心で、海岸部では飾磨津をはじめとする湊の整備に努め、米や特産品の流通に備えていました。高砂から出された川浚え願いについて、同年 8 月に河合道臣が検分に訪れ、御手伝普請に準じた取扱いで川浚えを行うことを許可します。

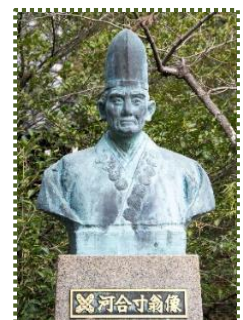


写真-4 河合寸翁像
（寸翁神社にて）

■ 工樂松右衛門の高砂湊修築

松右衛門による川浚普請は文化 5（1808）年の冬に始まり、文化 7（1810）年に終了しました。享和 2（1802）年、姫路藩が幕府代官所に「堪忍してください」と回答した川浚普請の費用は、藩が半額負担し、残る半額は地元が調達することに。

図-2 は、初代から三代の松右衛門が指揮した修築場所を示しています。湊にできた洲を取り除き、湊の機能を回復するとともに湊を沖へと拡張しています。

まず高砂川（堀川）上流にある百間蔵から川口番所までの約 1km の川浚えを行い、大型船が百間蔵近くまで通船できるようにしました。川の東向かいには「東嶋」あるいは「向島」と呼ばれる大きな中洲があり、ここにも船が停泊できるようにしました。

さらに、下流の所々を磐礫（いしがき）で修理し、杭を打ち堰を増設して土砂留としました。そして、百間蔵上流の平岸堤の向う岸には剣先土砂除堤を築きました。

また、百間蔵（南御蔵）の南東部分にある津留番所から東側へ橋を架けます。現在の永楽橋がある箇所です。さらに東側にある二つの中洲にそれぞれ石垣で堤を築くことで橋とし、加古川の対岸に繋げました。中洲と中洲を繋ぐ石組は屈曲しており、まともに水流の影響を受けないような工夫がしてあります（図-5 の絵「高砂宝蔵」参照）。

そして、川口番所から南北に形成されていた長い洲の一部を利用して、盛土をした上で石を積んで護岸とし580間(≒1,050m)の波止道を築き、その東側には船を係留できるようにしました。波止道は幅が広く、上には家屋を設置して石屋や鍛冶屋などを置いたそうです。突端には台場をつくり、元は川口番所のところにあった高灯籠を移設して船の出入りの便を図っています。波止道の先端部には波除けとして東風請波止と一文字波止を築きました。そして、波止道と波除けの間を船が係留できる湊として整えました。

ただ、この工事には多額の費用がかかりました。松右衛門が当初見積もった予算は銀 250 貫目でしたが、実際の総工費は 350 貫目になってしまい、不足分は高砂町中に割り付けられたそうです。

なお、高砂湊の浚渫・修築は初代松右衛門の代だけでは終わらず、二代、三代にわたって引き継がれていきます。

文化7(1810)年8月、松右衛門は姫路藩から五人扶持と切符金10両が給され、御水主並の御廻船船頭として召し抱えられました。そして、これまでの生活基盤があった兵庫津から故郷の高砂に住まいを移し、菩提寺も高砂町横町の十輪寺に移しています。

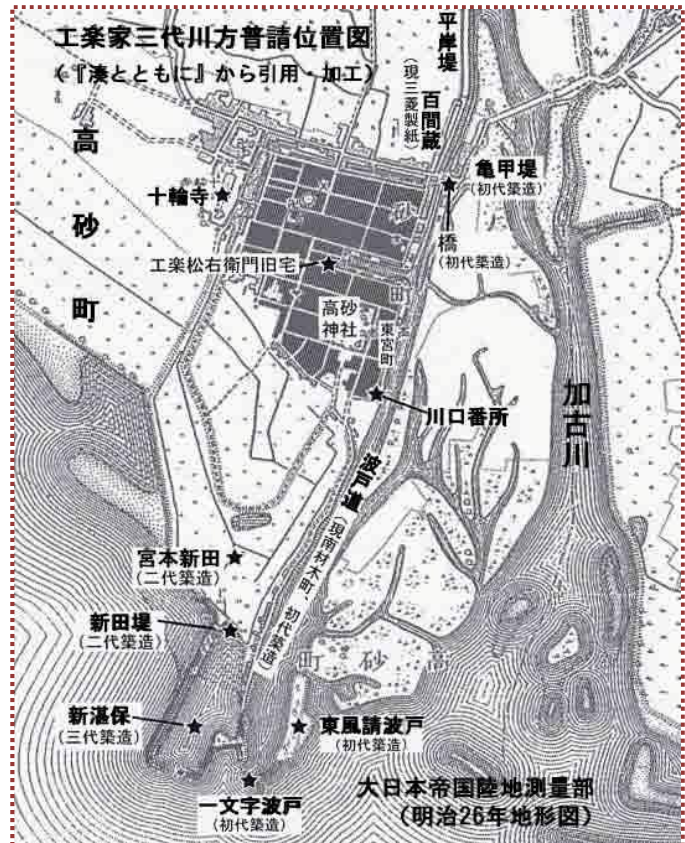


図-2 工楽家三代川方普請位置図



図-3 現在の高砂港周辺の地図

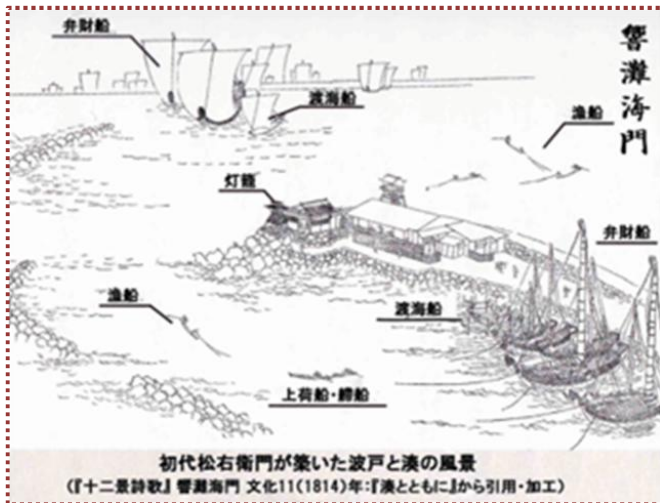


図-4 初代松右衛門が築いた波戸と湊の風景

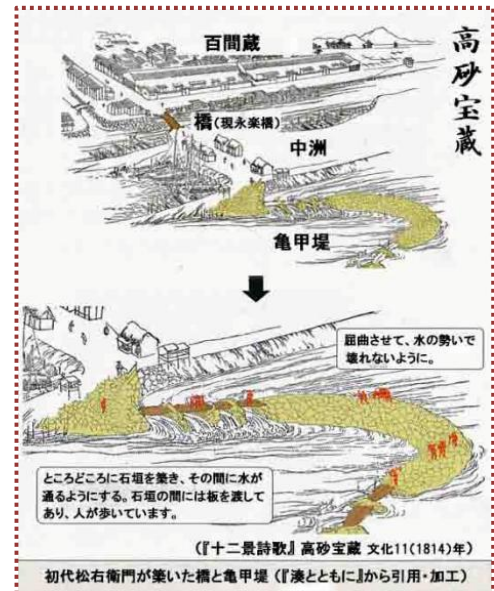


図-5 初代松右衛門が築いた橋と亀甲堤

■ モノローグ

「工楽」の意味は、「工事を楽しむ、工夫を楽しむ」という意味だそうです。我々の仕事もすべからうそうありがたいものです。「創意工夫、知恵を絞る」、そんな場面は必ずあるはず。よい知恵が浮かんだりすると楽しいものです。

忙しい日々を送る中で誰もが「もう少し余裕があったら知恵も絞れるのに…」と思いがちですが、筆者の経験からいうと、余裕ができて結局は何もしません。でもこれだけは言いたい。

～どうせやるなら仕事は楽しく♪♪～



写真-5 石祠の石積み根を下ろした
ハマヒルガオ

ハマヒルガオ (浜屋顔)

ヒルガオ科ヒルガオ属の多年草。典型的な海浜植物で、同属の他種がつる植物であるのに対して、匍匐(ほふく)性植物である。茎は砂の上を這い、葉は腎心形、やや丸くて基部は左右に張り出す。葉はつやのある緑で厚みがある。花は5～6月に咲き、淡紅色で、径4～5cm。花柄は葉より長く、葉の上に抜き出て咲く。



写真-6 東風請波止の北側にある石祠
周辺に咲いていたハマヒルガオ

【参考資料】

- 『高砂市史第二巻・通史編 近世』 高砂市史編さん専門委員会編 平成 22 年 6 月
- 『湊とともにー工楽松右衛門と江戸時代の高砂ー』 高砂市教育委員会編 令和 2 年 3 月
- 『工楽松右衛門とは その功績』 兵庫県高砂 工楽松右衛門 公式サイト
<https://matsuemon.net/deed.html>
- 『近世の高砂～中継港としての性格と機能』 山本徹也 昭和 46 年 10 月
- 『日本遺産と播磨：工楽松右衛門の挑戦～高砂の船と湊』 中川すがね・播磨学研究所編 令和 2 年 9 月
- 『神戸史談 321』 北井正昭編・神戸史談会 令和 6 年 1 月
- 『西部支部メールマガジン第 99 号～鞆の浦に残る江戸時代の港湾施設』 広島大学大学院先進理工系科学研究科 坂本直子 令和 3 年 12 月 <https://www.jasnaoe.or.jp/mailnews/west/O99/article03.html>
- 『姫路藩、河合道臣、ハマヒルガオ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 6 (2024) 年 11 月 『ひょうご水百景』 No.208
改訂：令和 8 (2026) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.208